咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて⑤　小栗忠順の活躍

文：河辺雄二、CFAY広報課

フィラデルフィア造幣局にて

幕府遣米使節の監察（目付）小栗豊後守忠順（ただまさ）は1860年6月14日フィラデルフィア造幣局を訪れ、長官ジェームス・スノウデンと会見する。小栗は渡米してすぐにサンフランシスコの造幣局を訪れており、アメリカにおける造幣局の下見を済ませたあとの訪問であった。

幕府遣米使節の主要メンバー。前列左から正使・新見豊前守正興（しんみぶぜんのかみまさおき・40歳）、監察・小栗豊後守忠順（おぐりぶんごのかみただまさ・32歳）、副使・村垣淡路守範正（むらがきあわじのかみのりまさ・48歳）、後列左から勘定方組頭・森田岡太郎清行（49歳）、外国奉行支配組頭・成瀬善四郎正典（39歳）。

（横須賀市自然人文博物館所蔵写真）

まず小栗は日本から持ち込んだ象牙のあしらわれた精巧な秤と安政小判三枚をおもむろに取り出すと、その重量を測ってみせる。小判の量目（重量）は8.99グラムと三枚ともまったく等しく、日本の小判がいかに精巧に作られているかを確認させた。そして次に小判の中に含まれる金を分析するように申し出た。造幣局係官が小判を分析してみると、三枚とも純金の品位（純度）は56.8％で、これまた日本の小判は均一な品質の貨幣であることが証明された。一方アメリカの1ドル金貨は量目1.67グラム、品位90パーセントという金含有率の高い貨幣であった。

この分析によって両国の貨幣は、

安政一両小判　＝　5.1グラム

米国1ドル金貨　＝　1.5グラム

の純金が含まれていることが分かった。両国の為替レートは小判三両対金貨４ドルなので、

金15.3グラム（日本）　＝　金6グラム（米）

という計算になる。

ここから小栗は本題に入る。どちらの貨幣も純金ではないなら、他の不純物も分析するように要求する。はじめ造幣局は手間のかかるこの分析に難色を示すが、小栗はいくら時間がかかっても結構と後に引かない。辛抱強く待つことになったこの分析の結果、アメリカ金貨の不純物は安価な銅ばかりなのに対し、安政小判は微少の銅の他はほとんどが銀であった。分析結果を小栗らは算盤をはじいて計算し、安政一両小判の金の価値は1ドル金貨で換算すると3ドル40セントに相当し、それに小判に含まれる不純物（銀）の価値を加えて3ドル57セントと算出した。分析結果の純金と不純物をそれぞれの価値で換算したりするので、その厄介な計算に造幣局職員は手間取り、ようやく出した答は日本側とまったく同じだった。アメリカ人は日本人の算盤を使った十進法の計算の速さに驚愕する。

ここで小栗は理路整然と小判三枚（実質10ドル71セント）と4ドルという日本にとって2.68倍の不利な為替レートの通商であることを述べ、為替の不公平をアメリカ人に納得させたのである。

江戸時代の貨幣について

江戸時代の貨幣システムは武田信玄の領国貨幣、甲州金の両、分、朱の単位を踏襲しており、小判一両＝四分、一分＝四朱というように四進法で構成されていた。

代表的貨幣である小判は江戸時代を通じ、徳川家康の慶長小判から元禄小判、宝永小判、享保小判など10種類が発行された。日本の開国当時は天保八年（1837年）鋳造の天保小判が使用されていた。

日本からの金流出

幕府は安政三年（1856年）の米国貨幣との通貨交渉で、金本位制を基軸としてアメリカ金貨4ドル（金含有量1.5 x 4＝6グラム）と天保小判一両（金含有量6.38グラム）の為替レートが妥当だと考えていた。そして当時アジア地域で流通していた国際通貨はメキシコドル銀貨であったので、メキシコ銀貨1ドル（銀含有量24.1グラム）と天保一分銀（銀含有量8.52グラム、貨幣価値は小判の四分の一）を同等価値として取り決めようとした。しかし駐日米公使ハリスはあくまで同じ量目の銀で交換すべきであるとして、メキシコ銀貨1ドルと天保一分銀三分（三枚）との交換レートを押し通した。銀含有量はメキシコ銀貨1ドル（24.1グラム）　＝　天保一分銀三枚（8.52 x 3枚＝25.56グラム）なので、このレートはほぼ同等といえる。

しかし問題となるのは日本の国内事情で、日本国内では天保小判一両（金6.38グラム）と天保銀四分（銀8.52 x 4枚＝34.08グラム）とが同価値で両替されていたので、交換比率は金1対銀5.34であるが、欧米での金と銀の交換比率は平均1対15だった。そこで例えば外国人がメキシコ銀貨4ドルを日本に持ち込んで天保一分銀12枚に交換し、これを天保小判に変えると三両になる。天保小判3枚を海外に持ち出して再びメキシコ銀貨に両替すると、海外では天保小判の含有する金の価値から換算してメキシコ銀貨12ドルに換えることが出来た。最初の4ドルが3倍に化けるわけで、これに目をつけた外国貿易商たちは貿易そっちのけで両替を繰り返し、日本は金の流出と銀の流入がやまなかった。

打開策として小判の吹き替え（改鋳）はインフレを招く懸念もあり、当初幕府は二の足を踏んでいたが、とにかく早急に国内の金が大量に海外に流出しているのを止めることが先決である。安政六年に量目を落とした安政小判を新鋳するが、貿易商たちの意を汲んだ諸外国公使の猛抗議で、すぐに鋳造停止に追い込まれていた。

幕府と小栗が仕組んだ是正策

フィラデルフィア造幣局で証明を終えた小栗は「分かれば結構」とばかりに引き揚げ、ワシントンで新たな通貨交渉に入るわけではなかった。この小栗の不可解な行動の鍵は、実は日本国内の動向にある。

ポーハタン号がアメリカに向け出航した二日後、幕府は突然天保小判を三両一分二朱（3.375倍）に、安政小判を二両二分三朱（2.6875倍）に増価を命じている。増価とは貨幣自体の価値を引き上げることで、安政小判の場合それまでの一両が約2.7倍の価値を持つことになったのだ。そして小栗がフィラデルフィア造幣局で会談に入る頃、日本では新たに万延一両小判が新鋳されていた。万延小判の品位は天保、安政両小判と等しいが、量目は大幅に小型化された。天保小判は万延小判の3.4倍の金含有量を持つので、増価によって一両の3.375倍の価値になった数値と符合する。これは明らかに増価の時点で改鋳の計画があったことを窺わせるものである。

この幕府の一連の増価と改鋳策によって、

万延小判三両（金含有量1.87 x 3枚＝5.61グラム）

アメリカ金貨4ドル（金含有量1.5 x 4＝6グラム）

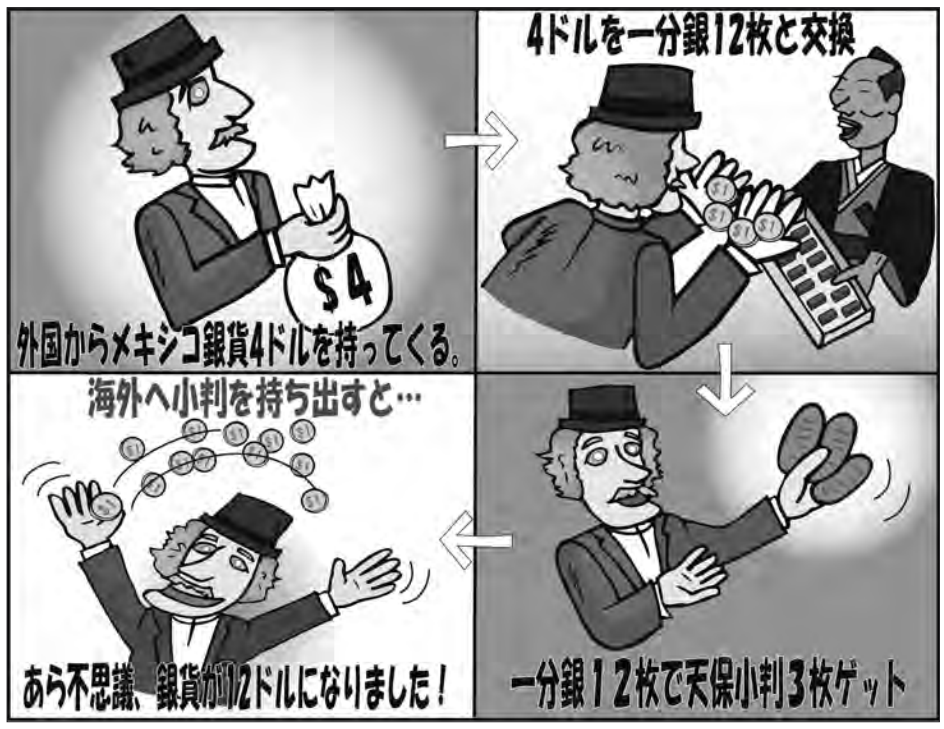
と日本にやや有利な為替レートとなり、また日本における金と銀の換金レートは欧米並みとなった。この結果外国商人たちは為替を利用した儲けを出すことは出来なくなり、たちまち金の流出は止まった。

こうしてみると小栗の会談はまさに事前通達のデモンストレーションであり、公使や貿易商たちから万延小判の新鋳（悪鋳）による苦情が米政府に寄せられても、フィラデルフィア造幣局で日本の正当性は証明済みのことで、文句の付けようがない様に先手を打ったのであった。これは遣米使節団のアメリカ出発前に計画され、造幣局での論証は使節の中でも飛びぬけて頭脳明晰な小栗に託された重要な任務だったと考えられる。

小栗豊後守に対するアメリカ人の評価

小栗はアメリカにおいても物怖じせず、毅然とした態度ではっきりと自分の意見を主張した。彼の卓越した聡明さと行動力に対し、

「オグロは使節団の中心である。なにごとも彼の同意がなければ決定できない。」

「監察オグロ・ブンゴ・ノカミは生き生きとした、表情豊な紳士である。威厳と、知性と、信念と、そして情愛の深さとが、不思議にまざりあっているのである。」

「オグロは明らかにシャープな男である。ワシントンで『日本使節のブラック判事』（当時のアメリカで人気と尊敬を集めていた人物）のニックネームがついたのも尤もである。」といったように、アメリカでの評価は高まる一方であった。（続く）